



## 老残の身の修行

会員 オ口 千晴 (18 期)

最高裁判官 2004 年 1 月 6 日～2008 年 9 月 2 日



青天の霹靂で赴任した最高裁判所判事を約5年間無事務め、退官して早くも4年余りが過ぎた。今は、若手法曹の指導育成に努めることを生業とし、余暇は生き甲斐を求めて日本古来の武道の一つである弓道の修行に励んでいる。

裁判官の職務は異文化の地の激務であった。親からもらった丈夫な身体と倒産事件で鍛えた胆力で任期を勤め、裁判官の心の拠りどころは、四元義隆氏の判事就任記念揮毫「施無畏」(衆生の種々の畏怖の心を取り除いて安心させ救済すること)の神髄に求め、その扁額を判事室に懸架して日々精進した。

そして満70歳での退官。在野への回帰は悲喜相半ばし、経年劣化の身は空蟬の心地であった。四元氏は在官中に96歳で他界されてお礼も言わずじまいであったので、退官直後の平成21年早春、無音のお詫びと墓参に終の住処である鎌倉円覚寺の塔頭「蔵六庵」を訪ねた。



その折、扁額「施無畏」の奉納先は四元氏のご子息の伝手で同寺の塔頭「桂昌庵」と決めてご挨拶に参上した。住職の須原耕雲和尚は卒壽を超えた身でありながら、境内に設えた『閻魔堂道場』で門弟に熱心に弓の指導をされていた。静寂の中での厳粛な所作と弦音・矢音。瞬時に魅了されて入門を乞い、以来、約3年有余毎週水曜日の早朝から恥をそそぎながら弓の稽古に励んでいる。

弓道は、竹弓(約2m20cm)に弦を張り、甲矢と乙矢を番え、28m先の的(直径約36cm)に向けて一手を射る静なる求道である。胴衣・袴の着脱、閻魔大王面前の澄心、射場での正座など老残の身には堪えるが、対峙する己である日本特有の精神性の高い武道であると心得て、俗念を去り黙々と射行を続けている。

最近、修行の場である『閻魔堂道場』は、須原耕雲和尚が、弓聖阿波研造範士の直弟子安澤平次郎、同門人北島芳雄、小沼栄治氏とともに、「弓と禅」の著者で阿波範士の弟子であったドイツ人哲学者オイゲン・ヘリゲル博士(元東北帝大外国人講師)の墓参と西欧での大射道の布教に同道し、数年後に安澤範士の追悼射会の帰路フランスで出会った座禅と弓の稽古をする道場に感銘して円覚寺の中に弓道場の建設を一念發起され、昭和52年に臨済宗円覚寺の塔頭「桂昌庵」に建造された由緒ある道場であることを知って恐懼感激した。

また、道場の正面上部には、ヘリゲル夫人から託された博士の帰国に際して阿波範士が贈った愛用の弓と博士常用の漆黒の弓の二張りが掲げて安置されている。須原老師は大正6年巳年生まれの子男、96歳にして健在である。

これが老残にして新参の身の畏縮至極の弓道修行の一部始終である。

(元最高裁判所判事)